國學院大學学術情報リポジトリ

学生懸賞論文発表 選評

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/107

学生懸賞論文発表

第一部門（本学文学部・神道文化学部・別科在籍者）

佳作

山本夏希（文学部日本文学科四年）

『源氏物語』「陽成院の御笛」考

―準拠とそのもたらすもの―

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

入選

石隈聡美（文学研究科史学専攻博士課程前期一年）

鯰絵と板元（本誌7月号に掲載）

佳作

座安浩史（文学研究科文学専攻博士課程後期三年）

格助詞の後ろにつくウチナーヤマトゥグチ

「ガ」の用法―石垣市方言を具体例に―

（所属・学年は、応募当時）

選　評

山本　夏希（文学部日本文学科四年）

『源氏物語』「陽成院の御笛」考

―准拠とそのもたらすもの―

山本夏希の論は、『源氏物語』横笛巻の「陽成院の御笛」の準拠について、歴史上の陽成院の「赤笛」にもとめることにより、柏木から薫へと相伝される『源氏物語』における意義を明らかにしようとしたものである。

本課題は、すでに、中世の『源氏物語』の注釈書『花鳥余情』に「天暦三年右大臣捧先皇賜勤子内親王箏譜三巻左衛門督執赤笛一管 元貞保親王笛歟左兵衛督将螺箏一面元良親王物有哥音 奏名而献之」と指摘されているものである。近年でも、相伝については、小嶋菜温子氏が「笛の相伝の物語を、一人の人間あるいは彼の家の相伝のエピソードに留まらないものとさせた王権の主題」であると述べ、準拠については、横山勇気氏が「「陽成院」は歴史上の陽成天皇だと考える他ないだろう。

同時に、柏木の笛、すなわち「陽成院の御笛」は、この「赤笛」を準拠とする」と述べている。

山本夏希の論は、これらの研究史をふまえて、柏木の横笛の相伝の準拠をもとに、新たな物語論、作品論を志向したところに意味があるといえる。

山本夏希論の主な指摘は、一つ、『朝覲行幸部類』正暦元年正月十一日の記録をもとに、「「赤笛」は村上朝では藤原師輔・安子が所有し、公的な場で、この「赤笛」を天皇への贈り物とすることで、天皇家とのつながりを密にしてきた、いわば藤原摂関家の栄躍の証であったのである」とし、「「赤笛」は、摂関家をついでほしいという願いを込めて、頼忠から公任へと受け継がれた名器だった」とした点、二つ、「『源氏物語』においても、藤原氏であり、内大臣家の嫡流である柏木と薫に「陽成院の御笛」を伝えることによって、柏木は子である薫に、自身は果たせなかった内大臣家の繁栄を実現してほしいと願っていた」とした点、三つ、「「陽成院の御笛」は、薫の栄華の象徴であると同時に、内大臣家の栄華と繁栄の証として、物語に描き出されている」とした点などにあるといえる。

ただ、三点目の指摘には、「陽成院の御笛」の準拠に基づいた上で、なぜ、宿木巻において、柏木の横笛の相伝が内臣家の栄華と繁栄の証としているのか、それにより紡ぎ出される物語の主題は何かという問題が内在していると思量される。また、研究史で掲げた小嶋菜温子氏の論を肯定するのか、否定するのか、論としての研究史上の問題も残る。

しかし、これらの問題があるとしても、山本夏希の論が『源氏物語』準拠論の研究史にかけがいのない課題を提起したことは事実である。

座安　浩史

格助詞の後ろに付くウチナーヤマトゥグチ「ガ」の用法
―石垣市方言を具体例に―

本論文は、琉球方言と全国共通語が接触することで生まれたいわゆるウチナーヤマトゥグチのうち、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチで用いられる強調を表す助詞「ガ」について、用法を記述した上で、琉球方言内の地域差を示し、さらにその成立過程について考察を加えたものである。

ウチナーヤマトゥグチについては、まず用語として琉球方言内全域での同様な現象を扱う語としては問題があり、さらにどのような現象と考えるべきかについても様々な見方が提示されている。本論文では、用語に問題はあるが、石垣市方言についてもウチナーヤマトゥグチという語を用い、定義は高江洲（2002）によるとする。その上で、この「ガ」は、意味や用法の点で伝統的な方言の係助詞 du と共通する点が多いが、伝統的な方言で同様に du を用いる沖縄本島豊見城市上田方言のウチナーヤマトゥグチでは、この「ガ」はみられないと報告している。そして、この地域差が生じた理由として、沖縄本島でもかつては用いられていたのが、共通語化の進み方の遅速あるいは伝統的な方言の違いにより、用いられなくなったと考察している。

ウチナーヤマトゥグチについては、その用法を精緻に記述したものは少なく、また従来の報告の多くが、沖縄本島方言のものであった。本論文はそのような中で、石垣市方言におけるウチナーヤマトゥグチについて記述し、さらに琉球方言の中でも地域差があることを示した点で意義が認められる。また、その用法を、伝統的な方言・全国共通語との関係の中で示そうとした意欲的な論文である。現在まさに変化の過程にある現象を緻密に記述していくことは、今後の琉球方言の変化のみならず言語変化の研究においても重要である。

今後座安氏に望むのは、同様の「ガ」がみられる宮古島や西表島（永田 1996）の状況も含め、伝統的な方言の du と「ガ」の異同について、さらに検討を加えてもらいたいということである。du は格助詞以外の助詞や他の品詞にも接続する。であれば、「ガ」の意味を du と全く同じとすることはできないであろう。また、なぜ強調を表す語形が「ガ」なのか、ということも含め、助詞の体系を考慮に入れた考察を期待する。さらに、ウチナーヤマトゥグチそのものについて、用語を含め座安氏なりの見解を示していってもらいたい。

なお、文章表現については、さらなる推敲が必要である。また例文の示し方などについても工夫してもらいたい。

以上、望むところも多々あるが、興味深い内容であり、今後のさらなる発展が期待できる研究であるといえよう。

参考文献

高江洲頼子 2002「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」『国文学解釈と鑑賞』67（7）

永田高志 1996『地域語の生態シリーズ　琉球編　琉球で生まれた共通語』おうふう

平成二十七年度　國學院雑誌学生懸賞論文募集

一、応募資格：第一部門（本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者）
　　第二部門（大学院文学研究科・専攻科在籍者）
一、枚　　数：四〇〇字詰三〇枚～四〇枚以内
一、テーマ：題目は問わない。
　　但し、未発表学術論文に限る（卒業論文も可）
一、締切日：平成二十八年三月末日（当日消印有効）
一、入　　選：賞状ならびに副賞（5万円）
　　佳　　作：賞状ならびに副賞（3万円）
一、発　　表：入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に掲載予定
一、選　　考：國學院雑誌編集委員会
一、投　稿　先：國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照